The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	武恵妃と桐壺更衣、楊貴妃と藤壺 ： 「源氏物語」桐壺巻の准拠の仕組みをめぐって
Author(s)	荒木, 浩
Citation	語文, 84-85, p. 78-97
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69059
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

武恵妃と桐壺更衣、楊貴妃と藤壺

――『源氏物語』桐壺巻の准拠の仕組みをめぐって――

荒木　浩

一　『源氏物語』と白河帝・後鳥羽院

鎌倉初期の説話集『古事談』巻二・臣節に、次の様な説話配列がある。

賢子中宮は、寵愛他に異なる故に、禁裏において薨じ給ふ也。御悩危急為りと雖も、退出を許されざるなり。閉眼の時、猶ほ御腰(1)を抱きて起ち避けしめ給はず、と云々。時に俊明卿参入して申して云はく、「帝者葬に遭ふ例、未だ曾て有らず候ふ。早く行幸有るべし」と云々。仰せて云はく、「例は此れよりこそは始らめ」と云々。

待賢門院【大納言公実女、母左中弁隆方女】は、白川院御猶子の儀にて入内せしめ給ふ。其の間、法皇密通せしめ給ふ。人皆な之れを知るか。崇徳院は白河院の御胤子、と云々。鳥羽院も其の由を知食して、「叔父子」とぞ申さしめ給ひける。之れに依りて大略不快にて止ましめ給ひ畢んぬ、と云々。鳥羽院、最後にも惟方〈時に廷尉佐〉を召して、「汝許りぞと思ひて仰せらるる也。閉眼の後、あな賢こ、新院にみすな」と仰せ事ありけり。案の如く新院は「見奉らん」と仰せられけれど、「御遺言の旨候ふ」とて、懸け廻らして入れ奉らず、と云々。（『古事談』二・五三、五四。原漢文。新日本古典文学大系『古事談　続古事談』の訓読による）

一読してわかるように、この二説話配列の横糸あるいは両話の類話性は、重層的である。明示的なものを例示すれば、「閉眼の時」「閉眼の後」の語を共通・連続させ、死をめぐる帝の重い言葉（先例をめぐる、また自らの遺言として）がともにテーマらしきものとしてあること、天皇の寵妃としての白河中宮賢子と鳥羽皇后璋子の対照的なありかた、しかもそのいずれにも白河の寵愛が潜在すること、など。後者は、「保元元年七月二日、鳥羽院ウセサセ給テ後、日本国ノ乱逆ト云コトハヲコリテ後、ムサノ世ニナリニケルナリ」（『愚管抄』、古典大系）と評される保元の乱直

前の秘話[2]を語って、説話を閉じる。白河の寵愛の輻輳する因果こそが、あたかも中世の到来と世の乱れの淵源であるかの如く、『古事談』の配列は語ろうとする。

以上のそれぞれは、またあらためて考察しなければならない説話文学上の問題なのだが、ここでは、もう一つの説話連想について考えてみたい。それは、『古事談』の表現上には顕在しない、『源氏物語』の伏在についてである。

すなわち前話五三は、後掲するように、『源氏物語』桐壺の帝が、病み、危篤となった桐壺更衣の宮中退出の際に示した未練を彷彿とさせる。そしてその彷彿が、また後話の「密通」による皇統の乱れと世の乱れのイメージと重層するとき、『源氏物語』の「世の乱れ」（桐壺巻）の語と、藤壺と光源氏の密通による、ねじれた血統の冷泉帝誕生とを併せ想起させる、という具合に。

藤原定家と同時代の歌人でもあった『古事談』作者源顕兼[3]（『本朝書籍目録』）の『源氏物語』周知は疑う余地もない[4]。また書物の存在が説話配列を支える、というのは『古事談』が既に採用する方法でもある[5]。しかし、『古事談』の個々の記述には『源氏物語』の直接参照の跡を窺わせる箇所は表現上は見あたらず[6]、『古事談』自体が『源氏物語』依拠をどこまで自覚していたかはよくわからない。それでも、前話の説話形象における白河の態度は、むしろ影響を否定することが難しいくらいに、『源氏物語』との類似性が高い。それは、あまりにも著名な次の場面のことである。

その年の夏、御息所、はかなきここちにわづらひて、まかでなむとしたまふを、暇さらに許させたまはず。年ごろ、常のあつしさになりたまへれば、御目馴れて、「なほ、しばしこころみよ」とのみのたまはするに、日々におもりたまひて、ただ五六日のほどに、いと弱うなれば、母君泣く泣く奏して、まかでさせたてまつりたまふ。かかるをりにも、あるまじき恥もこそと心づかひして、御子をばとゞめたてまつりて、忍びてぞいでたまふ。限りあれば、さのみも、えとどめさせたまはず、御覧じだに送らぬおぼつかなさを、いふかたなく思ほさる。いとにほひやかに、うつくしげなる人の、いたう面痩せて、「いとあはれ」と、ものを思ひしみながら、言にいでても、聞こえやらず、あるかなきかに消え入りつつものしたまふを御覧ずるに、来しかた行く末、おぼしめされず、よろづのことを、泣く泣く契りのたまはすれど、御いらへもえ聞えたまはず、まみなども、いとたゆげにて、いとど、なよなよと、我かのけしきにて臥したれば、いかさまにかとおぼしめしまどはる。輦車の宣旨などのたまはせても、また入らせたまひて、さらにえ許させたまはず。「限りあらむ道にも、おくれ先立たじ」と契らせたまひけるを、さりともうち捨てては、え行きやらじ」と、のたまはするを、女もいといみじと、見たてまつりて、

「限りとて別るる道の悲しきにいかまほしきは命なりけり
いとかく思うたまへましかば」と、息も絶えつつ、聞えま

ほしげなることはありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば、かくながら、ともかくもならむを、御覧じはてむと思し召すに、「今日始むべき祈りども、さるべき人々うけたまはれる、今宵より」と、聞こえ急がせば、わりなく思ほしながら、まかでさせたまふ。御胸のみつとふたがりて、つゆまどろまれず、明かしかねさせたまふ。

（『源氏物語』桐壺。引用は日本古典集成）

結局、更衣の死は、内裏退出後、帝への報告として叙述される（後掲）。白河の説話は、繰り返し逡巡する桐壺の、右の傍線部の類似をふまえつつ、波線部で示された、禁忌に従わざるを得なかった桐壺帝の先例の哀しみを、「例はこれより」、と打ち破るような、あたかも『源氏物語』当該部と対話するかの如き記述をなしているのである。[7]

先の白河説話の直接の出典は未詳であるが、『古事談』という作品は、『本朝書籍目録』が「雑抄部」に部類する如く、多く古記録などを抄出する形で説話を採録する。そうした和文ならざる描写の中の白河帝の形象に『源氏物語』の影響が見られるのだとすれば、[8]夙く特異な例として記憶されなければならないだろう。賢子の死に際して、白河は、『源氏物語』を先例として意識しつつ行動し、しかもその上で禁裏の先例を打ち破ろうとした、と描かれているのだとしたら。

一見荒唐無稽に見えるその想定は、しかしそれから一世紀以上経てば、既にむしろ常套へと転じつつあった。白河の末裔後鳥羽院は、きわめてよく似た状況において、もはや明示的に『源氏物語』に自らを重ね、その哀切な哀傷を自ら演じているかのようだ。

元久二年（一二〇五）の初冬、二十六歳の院がこれほどに懐かしんだ女性は、更衣尾張局である。いま洛南に法界寺という名刹を残す富強の日野家より出た法眼顕清の女子で、宮仕えの経緯は分からないが並ならぬ寵愛を受け、前年の七月皇子を生んだ。朝仁親王、のちに慈円に弟子入りし天台座主ともなる道覚法親王である。しかし尾張は産後の回復が悪く、里に下って養生したいと切に請うたが、血気盛んな院の愛執はこれを許さなかった。十月半ばに病状悪化し、死穢をはばかって退出した時には、院は悔恨の余り「限りある道（死）にも遅れじと思し召し顔」であったと側近の源家長の手記が伝えている。[9]（目崎徳衛『史伝後鳥羽院』三頁、二〇〇一年）

後鳥羽は建久九年（一〇九八）譲位して既に院として治天の君ではあったが、白河にとっての中宮賢子とはことなり、失ったのは『源氏物語』と同じ更衣であった。源家長の叙述ではあるが、後鳥羽院の哀傷の鋳型は、「限りある道（死）にも遅れじと思し召し」すと捉えられ、素直に『源氏物語』桐壺の表現（前掲破線部）を襲う。[10]

二　『源氏物語』依拠の史実と『長恨歌』

ただし、後鳥羽の愛妃喪失への嘆きは、その死を以て終わることなかった。その後、愛妃への想いは昇華され、あたかも『長恨

歌』のように、文学的に結晶していく、とも目崎徳衛氏は論じている（前掲書。なお注10参照）。『源氏物語』にも、更衣を失った帝の哀しみは、帝の重畳する長恨として、前掲部に続けて重畳として叙述される（後掲）。むしろ『古事談』の白河帝の賢子喪失譚の切り取りの方がやや唐突であった。あの逸話の本来の展開は、賢子崩後の白河の尽きることのない哀傷、もしくは長恨に引き継がれなければならなかった。『源氏物語』の影響を多く受け、『古事談』も記述を多く重ねるところの多い同時代の歴史物語『今鏡』は、それを次の様に記述している。

（賢子は）三条の内裏にてかくれさせ給ひき。御年二十八とぞ聞こえ給ひし。村上の御母（穏子）、梨壺にて失せ給ひて後、内にて后隠れ給ふ事、これぞおはしましける。（以下葬送のことを記す。中略）まだ三十にだにたらせ給はぬに、多くの宮たち生みおきたてまつり給ひて、上の御おぼえたぐひもおはしまさぬに、はかなくかくれさせ給ひぬれば、世の中かきくらしたるやうなり。白河の帝は、位の御時なれば、廃朝とて、三日は昼の御座の御簾もおろされ、世の政もなく、嘆かせ給ふこと、唐国の李夫人、楊貴妃などのたぐひになむ聞え侍りし。（以下帝の仏事と哀しみ。下略）」（『今鏡』二、講談社学術文庫）。

『扶桑略記』が叙述を賢子没後の白河の嘆きにしぼって、応徳元年（一〇八四）九月二十二日、「中宮源賢子三条内裡崩。于時年二十八。主上悲泣。数日不レ召二御膳一」、二十四日、「主上悶絶。天下騒動。歴二数刻一後復御二尋常一。毎月二十二日。丈六弥陀仏各一躰造立。毎度修二曼荼羅供一。為二中宮職御菩提一也。天下之政皆以廃務。帝依レ含レ悲。久絶二世上風波一。誠是希代事焉」（新訂増補国史大系）と記す異例に『今鏡』の関心も向かい、内裏での后崩御の先例を挙げて『古事談』説話が描く時間と故実の衝撃をさりげなく和らげた上で、その後の嘆きをむしろ焦点化する。但し注意しておきたいのは、『今鏡』が、后に遅れた帝の嘆きの先例を『源氏物語』ではなく、李夫人・楊貴妃に求めていることである。

確かに、「長恨者楊貴妃也」（『長恨歌序』）、愛妃喪失の帝の嘆きのメタファーとして、一見、そのことに違和感はない。史実ではない『源氏物語』をなぞらえに用いるよりは、またより的確な引証なのだろう。しかし、先に見たように、白河の逸話には二つの相があった。内裏で病む愛妃を引き留め、死を迎えること（『古事談』）と、『今鏡』のいう、死後の嘆きと。同じ帝の嘆きとして、後述する如く、李夫人のなぞらえはまさに相応しい。しかし、安禄山の乱で都を逃れた玄宗に具し、馬嵬の地において死を賜った楊貴妃のことを、内裏で崩じた后への譬えとするのには、いささかの飛躍がないだろうか。

だが、結句、ここに楊貴妃が出て違和感がないのは、明示されはしないものの、やはり『源氏物語』の文脈への理解と定着とが背景にあるだろう。先引部に続けて『源氏物語』は、更衣の死を次のように叙述し、桐壺帝の、あたかも白河帝の如く尽きせぬ嘆きをまず描いていた。

…御胸のみつとふたがりて、つゆまどろまれず、明かしかねさせたまふ。御使の行きかふほどもなきに、なほいぶせさを限りなくのたまはせつるを、「夜中うち過ぐるほどになむ、絶えはてたまひぬる」とて泣き騒げば、御使もいとあへなくて帰り参りぬ。きこしめす御心まどひ、何ごともおぼしめし分かれず、籠もりおはします。（『源氏物語』桐壺）

そしてそれより先、また後、『源氏物語』は、帝の更衣への処遇と想いを、繰り返し楊貴妃のようだ、となぞらえ続けていたが、

朝夕の宮仕へにつけても、人の心をのみ動かし、恨みを負ふ積りにやありけむ、いとあつしくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、いよいよあかずあはれなるものに思ほして、人のそしりをもえ憚らせたまはず、世のためしにもなりぬべき御もてなしなり。上達部、上人なども、あいなく目を側めつつ、いとまばゆき人の御おぼえなり。唐土にも、かかる事の起りにこそ、世も乱れ、あしかりけれと、やうやう天の下にもあぢきなう、人のもてなやみぐさになりて、楊貴妃の例も引き出でつべくなりゆくに、いとはしたなきこと多かれど、かたじけなき御心ばへのたぐひなきを頼みにてまじらひたまふ。（桐壺巻冒頭）

（桐壺の没後）命婦は、まだ大殿籠らせたまはざりけると、あはれに見たてまつる。（中略）このころ、明け暮れ御覧ずる長恨歌の御絵、亭子院の書かせたまひて、伊勢、貫之に詠ませたまへる、大和言の葉をも、唐土の歌をも、ただその筋をぞ、枕言にせさせたまふ。（中略）いと、かうしも見えじと、おぼししづむれど、さらにえ忍びあへさせたまはず、御覧じはじめし年月のことさへかき集め、よろづにおぼしつづけられて、時の間もおぼつかなかりしを、かくても月日は経にけりと、あさましうおぼしめさる。（中略）かの贈り物御覧ぜさす。亡き人の住処尋ねいでたりけむ、しるしの釵ならましかば、と思ほすも、いとかひなし。

たづねゆく幻もがなつてにても魂のありかをそこと知るべく

絵にかける楊貴妃の容貌は、いみじき絵師といへども、筆限りありければ、いとにほひ少なし。太液の芙蓉、未央の柳も、げに通ひたりし容貌を、唐めいたるよそほひはうるはしうこそありけめ、なつかしうらうたげなりしをおぼしいづるに、花鳥の色にも音にもよそふべきかたぞなき。朝夕の言種に、翼をならべ、枝をかはさむと契らせたまひしに、かなはざりける命のほどぞ、つきせずうらめしき。（桐壺巻）

その後の已むことのない更衣への想いを描く表現の中に、『今鏡』や『扶桑略記』と見まがう、桐壺帝の政事懈怠と御膳否召が描かれているのである。

雲のうへも涙にくるる秋の月いかですむらん浅茅生の宿

おぼしやりつつ、燈火をかかげ尽くして起きおはします。右近の司の宿直奏の声聞こゆるは、丑になりぬるなるべし。人目をおぼして、夜の御殿に入らせたまひても、まどろませた

まふことかたし。朝に起きさせたまふとても、明くるも知らで、とおぼしいづるにも、なほ朝政はおこたらせたまひぬべかめり。ものなどもきこしめさず、朝餉のけしきばかり触れさせたまひて、大床子の御膳などは、いと遙かにおぼしめしたれば、陪膳にさぶらふかぎりは、心苦しき御気色を見たてまつり嘆く。すべて、近うさぶらふ限りは、男女、いと、わりなきわざかなと言ひあはせつつ嘆く。さるべき契りこそはおはしましけめ、そこらの人のそしり、恨みをも憚らせたまはず、この御ことに触れたることをば、道理をも失はせたまひ、今はた、かく世の中のことをも、思ほし捨てたるやうになりゆくは、いとたいだいしきわざなりと、人の朝廷の例まで引きいで、さゝめき嘆きけり。

古典集成頭注も示唆するように、右の文章の末尾に、「人の朝廷の例まで引きいで、さゝめき嘆きけり」とあるのは、桐壺冒頭の「楊貴妃の例も引き出でつべくなりゆく」と共感する。同時に、「朝政（あさまつりごと）」という語の存在も、直接的に『長恨歌』を指し示す。『類聚名義抄』に「早朝」を「アサマツリコト」と訓み、『河海抄』が「奥入　春宵苦短日高起従此君王不早朝〈長恨歌〉」（山本利達・石田穣二校訂、角川書店）と注するように、それは、早くより知られた、『長恨歌』冒頭の、玄宗楊貴妃寵愛の日々の象徴的な文言であり、その古訓であった。[11]

如上、『源氏物語』桐壺の表現に依拠して、『今鏡』が白河の慟哭を楊貴妃になぞらえるコンテクストが見えてくる。類似した方法による楊貴妃のたとえを、『今鏡』は別の場所ですでに行っていた。

第一章「すべらぎの上」の「星合」に、

楊貴妃の契りも思ひ出でられて、星合ひの空いかに眺め明かさせ給ひけむと、いと哀れに、「尋ね行く幻もがな」とや思し召しけんと推測られてこそ、伝へ聞き侍りしか。

と書かれている。これは、後朱雀帝の寵愛を鍾めていた中宮嫄子が死去し、悲嘆に暮れる天皇の様子を述べている所である。文中「楊貴妃の契り」は勿論、白楽天の長恨歌の「比翼連理の契り」であり、「尋ね行く幻もがな」は、源氏物語・巻一桐壺に所出の「尋ね行く幻もがなってにても魂のありかをそこと知るべく」を、その侭用いている部分。猶、ここも長恨歌の「方術士」の飛翔の一文かとも考えられ、源氏物語からの引用と同時に長恨歌の採用であるとも言え、この種類の両者の融合調和した形は、今鏡に多い手法である。（河北騰「『今鏡』に見える源氏物語の影響」『中古文学』三五、一九八五年五月。『歴史物語論考』一九八六年に「今鏡に見える源氏物語」と改題改稿所収）

しかし、『今鏡』は、さらに漢李夫人をも重ねあわせて賢子への哀傷を描いている。それもまた、『源氏物語』を基軸とする譬喩の伝統に絡め取られるものであった。

『長恨歌』はすでに「漢皇重色思傾国」と始まり、漢武帝と李夫人を共示するが、『長恨歌』を前面に叙述する『源氏物語』桐

壺にも、李夫人の影が構造的に色濃く揺曳している。

「長恨歌伝」には楊貴妃の美貌は、「如漢武帝李夫人」と表現されたが、二人の大きな違いはその死に方にある。楊貴妃は安禄山の乱の勃発のために玄宗と共に西に向い、馬嵬坡に至って政治の乱れの責任を問われて死を余儀なくされる。（中略）この楊貴妃の不慮の死に対して、李夫人は病死するのである。桐壺更衣の病死の様は李夫人の死を参考にしたのではないか。

白居易の「李夫人」の冒頭に、

漢武帝　初喪李夫人　夫人病時不肯別

とあり、武帝は李夫人が病気の時にその傍らを敢えて離れなかった。桐壺帝が病気の更衣の退出をなかなか認めず、強いて離れようとしなかった部分に対応するのである。

（新間一美『源氏物語と白居易の文学』第一部Ⅰ「李夫人と桐壺巻」、二〇〇三年、初出一九七七年）

右の論文の中で、新間氏は以下、きわめて多くの事例を挙げ、桐壺更衣の病と死の形象をはじめ、一連の桐壺巻と漢李夫人の詩文世界との共通性を探っていく。ことほどさように、桐壺更衣はまた、『源氏物語』を通じて、漢李夫人とも一体化していく。

こうして、『今鏡』にみるように、また後鳥羽院の行為と詠歌が、立場としては白河院に、そして記述は多く『源氏物語』に依拠しようとしていたように、『源氏物語』桐壺をめぐる言述の拡がり、あるいは『源氏物語』という文学史は、楊貴妃と漢李夫人のイメージをも併せまといつつ、もはや先蹤史実としての枠組みや位置取りさえ整えようとしていた。

三　桐壺巻准拠の重層性

しかし、ここで注目しておきたいのは、如上の分析が明らかにする、『源氏物語』における楊貴妃説話のずれと、桐壺更衣への准拠の二重性である。

『源氏物語』桐壺は、その冒頭部で、帝の桐壺更衣寵愛を描いて、「楊貴妃の例」の再来を憂うる人々を描き、「ある時には大殿籠りすぐして、やがてさぶらはせたまひなど、あながちに御前去らずもてなさせたまひしほどに」との政事懈怠の帝を描いていた。そこでは『長恨歌』にいう如く、寵妃への愛情のあまり、「早朝」しなかったと、文意は出典の文脈にそった描写をしておきながら、その古訓「あさまつりごと」の語そのものは、敢えて桐壺更衣没後の場面に持ってきて、再び「人の朝廷」の例を思う世の嘆きを描いてみせる。この重畳した用法も、桐壺更衣に対する楊貴妃の准拠性の屈折と重層を示唆する。

藤井貞和氏は、『源氏物語』桐壺が持つ「諸姫の嫉妬・排斥・不安・怨恨」の要素が『長恨歌』・陳鴻『長恨歌伝』に見えず、「女主人公の病臥、退出がち…の要素は片鱗も長恨歌のうえに見いだすことができない……帝が、病める寵妃ゆえに溺愛を示し、他人の譏りをも弁えなかったという要素であるが、長恨歌の語り口には、それは、すっぽりと、欠落させられている」（「光源氏物

語の端緒の成立」『源氏物語の始源と現在』定本版、一九八〇年）と指摘している。それもまた、桐壺更衣の准拠の屈折と二重性の仕組みのなせるしわざであった。

ここにみられるあきらかな李夫人説話の影響、しかしながらそれは、物語の場面内的な影響と違う。虚構の設定、あるいは構想そのものに関わる仕方で影響をあたえているものであるように想われる。そして、それにもかかわらず、あるいはそれゆえに作者はそのことをおくびにも出さない。構想の基軸はあきらかに李夫人のためしであるにもかかわらず、作者はひた隠しに隠した。李夫人のためしとは言わず、場面内的に「楊貴妃のためし」であるとした。（藤井氏、前掲論文）

これほど自明な構想的な一致に対して、しかし藤井氏はまた「むろん桐壺の巻への長恨歌の影響という事実を軽視したり、まして否定したりすることはゆるされない。ここは、やはり、相違のあるのにもかかわらず、長恨歌の主題が喚起されてゆくところであるのにちがいない」（同上）といわざるを得なかった。『源氏物語』の本文に付き従う限り、『長恨歌』の影響は決定的であった。にもかかわらず、藤井氏が、明示されていない漢李夫人の准拠により本質的なものを見ようとし、あれほど顕在的な『長恨歌』については、逆説的に「場面内的」といういささか苦しい表現を繰り返し用いざるをえないほど、『源氏物語』に於ける譬喩の様相はねじれ、屈折的である。

ちりばめられた『長恨歌』のなぞらえは、むしろ長編構想上、紫上哀傷の光源氏の歌（幻巻）に承けられ（日向一雅『源氏物語の世界』第七章5、岩波新書、二〇〇四年他）、さらに最終巻夢浮橋に於ける薫と浮舟の照応へと引きとられる（小穴（表）規矩子「源氏物語第三部の創造」『国語国文』昭和三十三年四月号、新間一美「源氏物語の結末について」前掲載書第一部Ⅳ）とされる。結局、『長恨歌』のなぞらえは、桐壺巻に於いては、主人公・光源氏と藤壺の物語との関連を欠落し、その親たち（桐壺帝・更衣）の説明に寄与することに終始し、桐壺巻前半の更衣の死を画期に、その影響を終える、という風にこれまでは読まれてきたのである。果たしてそうなのだろうか。如上の屈折と欠落が感知される理由、それは、同様のねじれと隠蔽の方法が、『長恨歌』と楊貴妃に対しても仕組まれているからではなかったのか。私の旧稿はその疑義に出発する。

「長恨歌を用いて「桐壺」巻の前半を作った」（玉上琢彌「桐壺巻と長恨歌と伊勢の御―源氏物語の本性（その四）―」（『源氏物語研究』一九六六）といわれるほどの『源氏』桐壺の『長恨歌』受容だが、そこには、奇妙な空白が従来より指摘されている…。

桐壺の…巻には三本の虚構の軸が設定されている。桐壺更衣をめぐる愛と死、光源氏の生誕と成長、藤壺の登場とそのひとへ寄せる光源氏の思慕。このうち、第一の、桐壺更衣をめぐる愛と死の虚構軸に沿ってのみ、いわゆる長恨歌の影響が看られ、第二、第三の虚構軸にそって

はまったく長恨歌の影響が看られない、という顕著な本文上の事実が報告されている。（藤井貞和前掲論文）

新間一美氏も、「桐壺巻を大きく三段に分け」、「（一）帝の更衣への愛と光源氏の誕生。更衣の死。（二）秋の夜の更衣の里への使い。帝の秋の悲哀。（三）光源氏の成長と藤壺の入内。光源氏の結婚」としたうえで、「このうち長恨歌の物語に関わる記事がはっきりと現れるのは（一）と（二）である」とその対応を語る（新間「桐と長恨歌と桐壺巻」、前掲書、初出一九八三）。

『源氏物語』の冒頭に深く刻印された『長恨歌』は、しかし肝心の主人公達の形象に直接的には相渉ることなく、古代物語の常套に倣って、冒頭に必ず記される、主人公の父母達の紹介に寄与するだけものなのだろうか。

この空白に、ほぼ即応するのが、これまで輪郭を描いてきた、もう一つの楊貴妃説話であった、というのが、本稿の理解である。しかし『長恨歌』の楊貴妃は、桐壺更衣に直接するから、ここには解釈もしくは准拠の変更が存在することになるだろうか。そうした転嫁は、「大かたはつくり事なる中に、いささかの事を、より所にして、そのさまをかへなどしてかけることあり、又かならず一人を一人にあてて作れるにもあらず」という宣長の准拠論（『玉ノ小櫛』『本居宣長全集』）を引くまでもなく『源氏物語』の主人公光源氏に、あまた見られるところ。しかしここは、転用ととるべきではなく、むしろ准拠に、必然的な連続がある、と見るべきである。その連続とは、楊貴妃に准えられる桐壺「更衣によく似ているということで、いわば更衣の形代として入内してきた」（久富木原玲「藤壺造型の位相―逆流する『伊勢物語』前史―」『源氏物語研究集成』第五巻、二〇〇〇―四）、いわばもう一人の桐壺更衣たる義母、藤壺の存在そのものなのである。（拙稿「玄宗・楊貴妃・安禄山と桐壺帝・藤壺・光源氏の寓意―続古事談から見る源氏物語―」（『詞林』三六、大阪大学古代中世文学研究会、二〇〇四年一〇月。以下旧稿と呼ぶ）

もう一つの楊貴妃説話とは、純愛・「美化」「浪漫・神仙の方向への」『長恨歌』の楊貴妃（藤井氏前掲論文）に対し、同じ白居易の「新楽府」（『源氏物語』も多く所引する）などに見える「悪女としての楊貴妃像」（静永健『白居易「諷喩詩」の研究』、二〇〇〇年、勉誠出版）の分極の謂いであり、また玄宗の子寿王の妻であった彼女が、父玄宗に娶られたこと、しかものちにその玄宗寵臣の安禄山と密通する、という『長恨歌』が避けて描かなかった史実と伝えをいう（詳細は旧稿参照）[12]。

ここにもう一つの隠蔽の存在が明かされる。すなわち、楊貴妃のなぞらえは、実は藤壺に相当する、ということ。『源氏物語』の表層は、玄宗＝桐壺帝、楊貴妃＝桐壺更衣、というなぞらえに終始しているが、実は、『源氏物語』に楊貴妃説話は二層的に働き、桐壺＝玄宗、光源氏＝安禄山、藤壺＝楊貴妃という三角形の

なぞらえが潜在していること、さらに藤井氏が漢李夫人について述べた言葉を借りれば、如上の三角形が、『源氏物語』の「虚構の設定、あるいは構想そのものに関わる仕方で影響をあたえ」、しかもそのことを「おくびにも出さない」側面を考えてみたのが旧稿であった。

すでに『源氏物語』は、楊貴妃の裏側に漢李夫人の隠蔽を伏線として（楊貴妃と漢李夫人を重ねる読み自体は、新間氏が述べていたように、『長恨歌』と『長恨歌伝』を参照する『源氏物語』読者には本質的に自明のことである）、示している。その謎解きに気づいた読者に、楊貴妃が藤壺の准拠であるという二重性の謎解きを仕掛ける可能性は、本来、むしろ想定しなければならないことなのではなかったか。

しかもその隠蔽は、単なる隠蔽ではない。それは、譬喩的・象徴的意味で、藤壺と光源氏の密通と冷泉院誕生の隠蔽、また『長恨歌』における、楊貴妃の負の側面の隠蔽とも象徴的に照応する構造なのである。ならばこの問題は、これまで楊貴妃↓桐壺更衣として固定されていた作品に再読を促し、藤壺の准拠としての楊貴妃という視点から、『源氏物語』世界を転換させる必要を強いるであろう。

四　藤壺の准拠としての楊貴妃

楊貴妃を藤壺の准拠としたときに、どのような視界が展けるのか。旧稿で次のような問題点を指摘しておいた。

最後に、『源氏物語』藤壺をめぐるもう一つの重要な要素として、「桐壺とその子光源氏の両方に愛される藤壺の像が浮かび上がってくる」（久富木原玲前掲論文）などとされる、その「像」のことにも、触れておきたい。それは、「貴妃はもと親王の妻也。それを玄宗めしたるなり」と『続古事談』にも記された、楊貴妃が、玄宗とその子両方に愛される結果となった逸話との対応のことである。玄宗の皇太子ならざる「親王」だった寿王の妻楊貴妃を玄宗が奪い、自らの妃とするこの逸話は、『長恨歌』には省かれた古い楊貴妃の史実であるが、それは、『源氏物語』の桐壺帝・藤壺と、やはり皇太子ならざる光源氏との三角形の構図を、また逆順（一方は帝が子の妻を奪い、一方は子が帝の妻を奪う）に反転しつつ、鮮やかに照応することになる、ということなのである。（荒木旧稿）

そもそも、玄宗を桐壺帝に、桐壺更衣を楊貴妃へと重ねあわせようとするとき、実は世代と年齢とに、自明のずれがあった、ということにもあらためて目が向けられるだろう。桐壺帝と桐壺更衣の年齢はよくわからないが、光源氏と藤壺とは、五歳の年齢差が想定される同世代（葵上は藤壺の一歳下）で、帝と更衣はその親の世代である。玄宗皇帝と三十歳以上の年齢差があった楊貴妃とのなぞらえは、そもそも自ずと藤壺に限定される。[13]

『源氏物語』の楊貴妃は藤壺だった、と考えて物語を読むとき、『源氏物語』桐壺の物語はきわめて自然に、次のような語り口と

の類似を顕わにする。

昔、もろこしに、玄宗と申すみかどおはしけり。もとより、色をなむ好み給ひける。后をば源憲皇后といひ、女御をば、武淑妃となむ聞えける。いみじう、あひおぼしける程に、とりつづき、二人ながら亡せ給ひにけり。それ、おぼしめし嘆きて、これらに似たる人やあると、もとめ給ふ程に、やうやう、楊元琰といへる人のむすめありけり。容姿、世にすぐれて、めでたくなむおはしける。みかど、これを聞こし召して、むかへとりて御覧じけるに、はじめおはしける女御、后にもまさりて、めでたくなむおはしける。三千人の寵愛、一人なむおはしけるを、もてあそび給ひけるほどに、世の中の政治をもし給はず。(14)(『俊頼髄脳』、日本古典文学全集『歌論集』)

むかし、唐の玄宗と申けるみかどの御時、世中めでたくおさまりて、ふく風も枝をならさず、ふる雨も時をたがへざりければ、みな人あめのしたおだしきにほこりて、花をおしみ月をもてあそぶよりほかのいとなみなし。御門も、色にめで、かにのみふけり給へる御心のひまなさにや、よろづをば左大臣ときこゆる人にまかせて、やうやくみづからの御まつりごとをこたらせ給けり。

これよりさきに、元献皇后、武叔妃などきこえたまひしきさき、世にならびなく御こころざしふかくおはしましき。それはかなくならせ給ひてのちは、あまたのなかに御心のかなひたる人おはせざりき。これにより、高力士におほせられて、みやこのほかまでたづねもとめさせ給に、楊家の娘をえ給てけり。…(以下楊貴妃の美しさの描写など。下略)(『唐物語』講談社学術文庫)

右の記述の根拠は『長恨歌伝』である。『唐物語』は同文的に『長恨歌伝』を和解し、『俊頼髄脳』についても、日本古典文学全集『歌論集』頭注が言うように、記述の基本的は『長恨歌伝』に沿うている(『楊太真外伝』等も類同)。

…先レ是、元献皇后、武淑妃皆有レ寵、相次即レ世。宮中雖二良家子千万数一、無二可レ悦レ目者。上心忽忽不レ楽。時毎歳十月、駕幸二花清宮一。内外命婦、熠耀景従、浴日余波、賜以二湯沐一。春風霊液、澹二蕩其間一。上心油然若有レ所レ遇、顧二左右前後一、粉色如レ土。詔二高力士一、潜捜二外宮一、得二弘農楊玄琰女于寿邸一。既笄矣。…(あたかもその様は)如二漢武帝李夫人一。(近藤春雄『長恨歌・琵琶行の研究』による)

ただし、『俊頼髄脳』や『唐物語』などでは、『長恨歌伝』にいう、楊貴妃を最初に得たのが玄宗の子寿王であり、「得…于寿邸既笄矣」として、玄宗に見出されたとき楊貴妃は成人しており、しかも「すでに」玄宗の子「寿王の妃であったのを、父の玄宗が奪って宮中に入れた」「美しくない」「関係」があったことを省略する。結果的に、「それにはふれず、ただ深窓のなよなよした美女として」楊貴妃を「描き出す」(以上引用は近藤春雄前掲書)『長恨歌』の世界を保持するのである。

如上の語り口は、元献と武恵妃とを並列的に、同時期的に描き、

記述は楊貴妃の登場のために寄与させられている。それは『太平記』においてより短絡されている。

昔唐ノ玄宗位ニ即給ヒシ始、四海無事ナリシカバ、樂ニ誇リ驕ヲツヽシマセ給ハザリシカバ、アダナル色ヲノミ御心ニシメテ、五雲ノ車ニ召レ、左右ノヲモト人ニ手ヲ引カレ、殿上ヲ幸シテ後宮三十六宮ヲ廻リ、三千人ノ后ヲ御覧ズルニ、玄獻皇后・武淑妃二人ニ勝ル容色モ無リケリ。君無限此二人ノ妃ニ思食移リテ、春ノ花秋ノ月、イヅレヲ捨ベシトモ思召サヾリシニ、色アル者ハ必衰ヘ、光アル者ハ終ニ消ヌル憂世ノ習ナレバ、此二人ノ后無幾程共ニ御隱アリケリ。玄宗餘リニ御歎有テ、玉體モ不穩シカバ、大臣皆相許テ、イヅクニカ前ノ皇后・淑妃ニ増リテ、君ノ御心ヲモ慰メ進スベキ美人ノアルト、至ラヌ隅モナクゾ尋ケル。爰ニ弘農ノ楊玄琰ガ女ニ、楊貴妃云フ美人アリ。(『太平記』三七、旧大系)

しかし次代肅宗の母である元献皇后は、「開元十七年后薨」(『旧唐書』列伝二・后妃上・玄宗元献皇后楊氏)、開元二十四(五)年に亡くなる武恵妃[15]より、相当以前に没している。『旧唐書』では、あくまで武恵妃一人の逸話として次の様に語られる。

玄宗楊貴妃、高祖令本、金州刺史。父玄琰、蜀州司戸。妃早孤、養於叔父河南府士曹玄璥。開元初、武恵妃特承ニ寵遇一、故王皇后廢黜。二十四年恵妃薨、帝悼惜久之、後庭數千、無ニ司一意者。或奏ニ玄琰女姿色冠代一、宜レ蒙ニ召見一。時妃衣ニ道士服一、號曰ニ太真一。既進見、玄宗大悅、不レ期レ歳、禮遇如ニ恵妃一。太真姿質豐豔、善ニ歌舞一、通ニ音律一、智算過レ人。毎倩盼承迎、動移ニ上意一。宮中呼為ニ「娘子」一、禮數實同ニ皇后一。(『旧唐書』列伝一・后妃上・玄宗楊貴妃、中華書局刊)

『長恨歌伝』で楊貴妃を漢李夫人の如し、と譬えていたのが、ここでは、武恵妃の如し、となっていることにも注意される。『旧唐書』に就けば、傍線部の玄宗の武恵妃に対する愛情は、あたかも先に見た、他の夫人を凌駕する桐壺更衣に対する寵愛と死への嘆きに相同する。しかしなによりここで注目すべきは、その〈形代〉としての楊貴妃の描写(波線部)が、更衣の〈形代〉藤壺に対する帝の愛情の転調として、ほぼ『源氏物語』の次の記述に対応していることである。

年月に添へて、御息所の御ことをおぼし忘るるをりなし。慰むやと、さるべき人々を参らせたまへど、なずらひにおぼさるるだにいとかたき世かなと、うとましうのみよろづにおぼしなりぬるに、先帝の四の宮の、御容貌すぐれたまへる聞こえ、高くおはします、母后世になくかしづきこえたまふを、上にさぶらふ典侍は、先帝の御時の人にて、かの宮にも親しう参り馴れたりければ、いはけなくおはしましし時より、見たてまつり、今もほの見たてまつりて、「亡せたまひにし御息所の御容貌に似たまへる人を、三代の宮仕へに伝はりぬるに、え見たてまつりつけぬを、后の宮の姫宮こそ、いとようおぼえて生ひいでさせたまへりけれ。ありがたき御容貌人になむ」と奏しけるに、まことにやと御心とまりて、ねむごろ

に聞えさせたまひけり。母后、あなおそろしや、春宮の女御のいとさがなくて、桐壺の更衣の、あらはにはかなくもてなされし例もゆゆしうと、おぼしつつみて、すがすがしうもおぼしたただりけるほどに、后も亡せたまひぬ。心細きさまにておはしますに、「ただわが女御子たちの同じ列に思ひきこえむ」と、いとねむごろに聞こえさせたまふ。さぶらふ人々、御後見たち、御兄の兵部卿の親王など、かく心細くておはしまさむよりは、内裏住みせさせたまひて、御心も慰むべくなどおぼしなりて、参らせたてまつりたまへり。藤壺ときこゆ。げに御容貌ありさま、あやしきまでぞおぼえたまへる。（桐壺）

記述は、更衣の事を忘れられない帝（傍線部）が、その気持ちの慰めになれば、と様々な御名を求むれど得ず、思い屈するところへ、藤壺が見出される。彼女は不思議なほど更衣とよく似ていた、という（波線部）。彼女の待遇は、恐くは年令から楊貴妃が「娘子」と呼ばれ、皇后に準じた扱いを受けた、とされるのに対し、帝の皇女と同列に扱おう（二重傍線部）と遇される。『旧唐書』の当該傍線部等との近似は十分に関知されるだろう。藤壺の桐壺更衣への酷似は、続いて母の面影を求める光源氏の思慕を生む、と物語は叙述を続けていき、物語の始まりの主要な因果が一揃い出来することとなるのである。

武恵妃の人となりとイメージは、純愛の人というよりはむしろ権謀術策の存在で、その意味では桐壺更衣とは距離がある。しかし、ここで注目すべきは、玄宗の武恵妃に対する寵愛故に、その子寿王が、皇太子の地位を冒そうとしていた、と描かれることであろう。

（開元）二十五年、皇太子瑛得レ罪。二十六年六月庚子、立レ上為二皇太子一…初、太子瑛得レ罪、上召二李林甫一議二立儲貳一。時壽王瑁母武恵妃方承二恩寵一。林甫希レ旨、以レ瑁対。…（『旧唐書』本紀一〇・粛宗）

瑛母趙麗妃、本伎人。有二才貌一、善二歌舞一。玄宗在二潞州一得レ幸。及二景雲升儲一之後、其父元禮、兄常奴擢為二京職一、開元初皆至二大官一。及二武恵妃寵幸一、麗妃恩乃漸弛、時鄂王瑤母皇甫德儀、光王琚母劉才人、皆玄宗在二臨淄邸一以二容色一見レ顧、出二子朗秀一而母加レ愛焉。及二恵妃承レ恩、鄂・光之母亦漸疏薄、恵妃之子壽王瑁、鍾愛非二諸子所一比。（『旧唐書』列伝五十七・玄宗諸子・庶人瑛）

武恵妃は勿論妃であり、皇后ではなかったが、玄宗の糟糠の妻ともいうべき王皇后に子供がなかったので、その権勢は初めから王皇后を凌ぐものがあった。しかも開元十二年、王皇后が兄の罪に依って、皇后の地位を追われて庶民となり、間もなく失意の中に死するに到って、武恵妃の地位は確固たるものになったのである。玄宗には、現在皇太子に立てられている亨（＝粛宗）の母である楊氏や、美貌を以て知られた趙麗妃などの女性があったが、いずれも早く亡くなり、武恵妃ひとりが玄宗の寵をほしいままにし、皇后と同じ待遇を受け、

一門は顕職についていた。武恵妃は自分が生んだ寿王を皇太子に立てるために、いろいろと策謀を廻らした。趙麗妃の生んだ皇太子瑛が廃されて死を賜ったのも、その讒言に依るものと一般には噂されていた。武恵妃は開元二十五年十二月に薨じたが、若しもう少し生きていたら、寿王は皇太子の地位に即いたに違いなかった。廃太子の議が行われてから幾許もなくして武恵妃は歿し、ために寿王の立太子のことも行われなかったのである。生前の母武恵妃の専横眼に余るものがあったので、それだけにいったん武恵妃が薨ずると、寿王の立場は頗る微妙なものになった。それまでは玄宗も寿王を愛していたが、併し、それは母武恵妃あってのことで、武恵妃が亡くなると、その愛情に後退を来してもさして異とするに当たらなかった。（中略）母武恵妃が死すると共に、その子供も亦死んだのであった。（中略）武恵妃が薨ずると共に、その子寿王もまた権力者が特に眼をかけねばならぬ皇子ではなくなったのである。玄宗皇帝もそう思った筈であり、子の寿王もまたそう思ったのである。（井上靖『楊貴妃伝』）。

その寿王擁立の起点があくまで玄宗の武恵妃寵愛にある、と説明されている点は、桐壺帝・桐壺更衣と光源氏をめぐる次の言説と同じなのである。

さきの世にも、御契りや深かりけむ、世になくきよらなる玉の男御子さへ生まれたまひぬ。いつしかと心もとながらせたまひて、急ぎ参らせて御覧ずるに、めづらかなるちごの御容貌なり。一の御子は、右大臣の女御の御腹にて、寄せ重く、疑ひなき儲けの君と、世にもてかしづききこゆれど、この御にほひには並びたまふべくもあらざりければ、おほかたのやむごとなき御思ひにて、この君をば、私物に思ほしかしづきたまふこと限りなし。

はじめよりおしなべての上宮仕へしたまふべき際にはあらざりき。おぼえいとやむごとなく、上衆めかしけれど、わりなくまつはさせたまふあまりに、さるべき御遊びのをりをり、何事にもゆゑある事のふしぶしには、まづまうのぼらせたまふ、ある時には大殿籠りすぐして、やがてさぶらはせたまひなど、あながちに御前去らずもてなさせたまひしほどに、おのづから軽きかたにも見えしを、この御子生まれたまひてのちは、いと心ことに思ほしおきてたれば、坊にも、ようせずは、この御子の居たまふべきなめりと、一の御子の女御はおぼし疑へり。人より先に参りたまひて、やむごとなき御思ひなべてならず、御子たちなどもおはしませば、この御方の御いさめをのみぞ、なほわづらはしう、心苦しう思ひきこえさせたまひける。（桐壺）

李瑛廃太子の後、「それでは皇太子は寿王に決まったかというと、そうではない。肝心の武恵妃がその前に世を去ってしまったからである。（中略）玄宗の武恵妃に対する愛は最後まで衰えず、死後も追慕の情はつのるばかりであったが、その子の寿王に対する気持ちにはかなり大きな変化が生じていた。李瑛なきのちの朝

廷で、立太子問題は焦眉の問題であったが、事は一気に解決した。皇太子となったのは寿王ではなく忠王李璵（＝粛宗）であった。擁立の計画者は張九齢でも李林甫でもない宮中第三番目の権力者、高力士であった。高力士が忠王を玄宗に推薦したのは、李璵がすでに年長者となっていたことからである。」（村山吉廣『楊貴妃大唐帝国の栄華と暗転』中公新書、一九九七年）。この逸話と相当する部分も一応挙げておこう。

…人の朝廷の例まで引きいで、ささめき嘆きけり。

月日経て、若宮参りたまひぬ。いとどこの世の物ならず、きよらにおよすけたまへれば、いと、ゆゆしうおぼしたり。明くる年の春、坊さだまりたまふにも、いと引き越さまほしうおぼせど、御後見すべき人もなく、また世のうけひくまじきことなれば、なかなか危くおぼし憚りて、色にもいださせたまはずなりぬるを、さばかりおぼしたれど、限りこそありけれと、世の人も聞こえ、女御も御心おちゐたまひぬ。（桐壺）

寿王は武恵妃が玄宗との間に儲けた子の内、三人の兄の夭折を忌んで、光源氏とは逆に「あえて宮中で育てず、玄宗の兄の寧王の下で養わ」れた（村上前掲著）。しかし玄宗の寵愛は深かった。一方、武恵妃は退けた王子たちの霊にたたられて死んだように語られる。「武恵妃數見二三庶人為レ祟」（『旧唐書』庶人瑛）。「人の心をのみ動かし、恨みを「負ふ積りにやありけむ」（桐壺）との類似が想起されるだろう。

その寿王は最初楊貴妃を娶る。そして寿王の皇太子を阻んだ形となった高力士が、楊貴妃を見いだし、寿王の父、玄宗が、『源氏物語』とは逆転して、子の妻を奪う、という物語の因果が生まれるのである。

五　〈貴妃〉と〈妃〉と―楊貴妃と藤壺

如上、藤壺が楊貴妃を准拠とする、という視点は、『源氏物語』再読にいくつかの知見を与えてくれる様に思う。もちろんそれは、反転を含むなぞらえである。しかしたとえば、武恵妃の悪女像が、反転して弘徽殿の女御のそれに展開されている、などと論ずれば、かえってその確からしさを喪失してしまうかも知れない。[16]

しかし、先の『旧唐書』で見たように、楊貴妃は「宮中呼為二「娘子」一、禮數實同二皇后一」と語られて入内する。その一端が『源氏物語』に於ける「ただわが女御子たちの同じ列に思ひきこえむ」という帝の言葉に呼応しているのであれば、後者、楊貴妃が「同皇后」として遇せられ、その後天宝初に「貴妃」となるということ（『旧唐書』玄宗楊貴妃）が藤壺の地位の問題に示唆的であるかも知れない。

源氏物語の中では、後宮における藤壺の身分について、〈妃〉であるとも「女御」であるとも必ずしも明記されてはいないのであるが、岷江入楚など古註の時代から特別な根拠もなく女御として考えるのが通説であった。それにたいして、藤壺は〈妃〉であるとする新説を小松登美氏が出され、その小松

説をさらに詳細に補強されたのが今西氏説である。[17]（増田繁夫『源氏物語と貴族社会』第一章・三「藤壺は令制の〈妃〉か」、二〇〇二年）

柳たか氏の「日本古代の後宮について」（『お茶の水史学』一三、一九七〇年九月）に拠れば、令制の「妃」確例の最後は醍醐朝の為子内親王。「嵯峨天皇の後絶えて久しかった「妃」の称号が、醍醐天皇の時一例ポツンと現われその後は見られ」ず、一方為子は、嵯峨朝の以来の突出的特例であった。嵯峨朝の後の「妃」の消失と歩調を併せ、次々代仁明から宇多までは皇后が空位で、「妃」の特例の醍醐朝に、中宮も復活する（穏子）。

私にいう藤壺の准拠楊貴妃は、「貴妃」という「妃」に通じる称号を有するが、その「貴妃」という称号については、玄宗の代に転変があった。唐に於ける后妃の制度は、隋を承けつつも、皇后の下の三夫人を、高祖の武徳年間に四妃に換え、貴妃、淑妃、徳妃、賢妃各一人を夫人になしたという。しかしそれは、開元の治時代の玄宗によって、復古的に、また合理的に、貴妃の呼称を含む一人分を減じて、三夫人に復された、という。

妃三人。〈正一品。周官三夫人之位也。隋依二周制一、立二三夫人一。武徳立二四妃一。一貴妃、二淑妃、三徳妃、四賢妃、位次后之下。玄宗以為、后妃四星、其一正后、不レ宜二更有一四妃一、乃改二定三妃之位一。惠妃一、麗妃二、華妃三…〉（『旧唐書』四十四・志二十四・職官三・内官）

唐因二隋制一、皇后之下、有二貴妃、淑妃、徳妃、賢妃各一人一。開元中、玄宗以二皇后之下一立二四妃一、法二帝嚳一也。而后妃四星、一為二正后一。今既二正后一、復有二四妃一、非二典法一也。乃於二皇后之下一立二惠妃、麗妃、華妃等三位一、以代二三夫人一。（『旧唐書』列伝一・后妃上）

玄宗は開元の時、后妃は四人であるべきで、后の下にさらに四妃があるのは正しくない（「以二后下一復有二四妃一非レ是」『新唐書』列伝一・后妃上、中華書局）として「貴妃、淑妃、徳妃、賢妃」を「惠妃、麗妃、華妃等三位」と転じたはず。その玄宗が旧来に復する特例として、貴妃を冊したことは、瞠目すべきことであった。

秋八月甲辰、冊二太真妃楊氏一為二貴妃一。是月、河南睢陽、淮陽、譙等八郡大水。（『旧唐書』本紀九・玄宗下、天宝四年）

天宝初、進冊二貴妃一。（『旧唐書』后妃上・楊貴妃伝）

称号の異例と復活は、醍醐朝准拠の桐壺巻の藤壺の呼称の異例を透かす。[18]

『源氏物語』本文に於いても、母藤壺が亡くなったあと、自らの出生の秘密を知ろうとする冷泉帝をめぐる言述の中で、殊更に唐土の「みだりがはし」さ、「よこざまのみだれ」が言及され、「藤壺像にはさらに、異国の后の投影があるとも言われる」（後藤祥子、注17所掲論文）。[19]興味深い遇合である。

武淑（惠）妃は「女御」と呼ばれる（『俊頼髄脳』『今昔物語集』）。淑妃（『長恨歌伝』他）と惠妃（『旧唐書』他）の呼称の揺れもまた、玄宗の后妃制度改定と呼応する。また楊貴妃は、皇后

に準じて礼せられた（『旧唐書』前掲）ともあった。当時の中国の后妃の地位としての楊貴妃の貴妃をそこに重ねると、あたかも藤壺の〈妃〉と〈女御〉の解釈の揺れと相応するようにも思うがいかがだろう。

六　准拠の仕組み—おわりにかえて

先行研究が繰り返し説くように、『源氏物語』が表立ってのなぞらえの基調とした『長恨歌』における楊貴妃は、純愛であり、それは『旧唐書』后妃伝にまで遡源している。

玉環が寿王妃であったのは厳然たる事実である。けれども后妃伝は、それに一言もふれず、あたかも道教の尼から直接玄宗に輿入れしたように書いている。そういえば白楽天の長恨歌も真実をひた隠している。[20]（藤善真澄『安禄山と楊貴妃　安史の乱始末記』清水新書、一九八四年）

それは早く、『長恨歌序』やそれとふかく関わる『注好撰』などの説話形象により純化され、浦島説話に通じる様な、前世からの愛をも奏でようとする。[21]

しかし、楊貴妃が玄宗寵臣の安禄山を養子にした後、二人は密通を果たした、とのほのめかしは、すでに白居易『胡旋女』（新楽府）に読み取れるとされ、唐代にはすでに存在する伝説であり、それは時代を経てより展開し、『資治通鑑』に定着する。日本でも『続古事談』に明記された伝承であった（荒木旧稿参照）。

しかし、『長恨歌』につく限り、あるいは『長恨歌』に読者の目を奪わせておく限り、楊貴妃の持つ悪女性や密通の危険どころか、楊貴妃が玄宗の子寿王とすでに婚姻した成人女性であったことさえ、きれいに隠避され、表に現れようとしない。それは秘密となって、『源氏物語』の読者を待つ。楊貴妃が桐壺更衣であるという本文にとらわれた読者は、藤壺と楊貴妃との対応が見えず、『長恨歌』は玄宗と桐壺更衣純愛のメタファーとして輝き、もう一人の楊貴妃が、帝の子との密通のメタファーであることを顕在化しない。こうして『長恨歌』における隠蔽は、物語の登場人物と同様に、藤壺と光源氏の密通と、その不義の子の存在を、いわば〈准拠の仕組み〉として覆い隠すのである。そしてそれは『源氏物語』作者にとって、『長恨歌』自体の方法を深く解読すればあるいは自然に得られる方法だったようにも思う。楊貴妃は漢李夫人の如く、また武恵妃の如く。『長恨歌伝』は前者を教え、『源氏物語』の桐壺更衣と楊貴妃の重ね合わせを示唆するが、そのことに導き惹かれるベクトルは、後者の比定、藤壺と楊貴妃の重ね合わせを静かに隠蔽して、物語の構造的な謎の仕組みを巧みに構成する。

『源氏物語』自体の卓越さと複雑さはもとより、それ以前に分け入りがたく巨城のように聳える研究史の前に、しばしば無力感を覚えることがある。それでも、私のように気ままな読者には、旧稿と本稿とで、帰着らしいものも見えてきたように思う。藤壺における楊貴妃准拠の視点の発見は、『源氏物語』の主人公たち

を捉まえる重要性の中にある故に、避けることのできない、研究史共有の議論の対象であると今は考えている。

注

（1）諸本「御殿」。益田本「御腰」、東大国文本「殿」に「腰イ」と傍記するのにより改訂。「腰」であれば、冥界に旅立たんとする賢子を引き留める白河の行為を表現し、また冥顕を逆にして京極御息所の腰を抱いた源融の霊（巻一・七）を思わせる。金沢大学本は「殿」に「屍」を傍記、同本による丹鶴本は「屍」と改訂。「屍」であれば、「殿」は草体からの誤写か。大江定基の出家の機となった妻の死（『今昔』一九・二、『宇治拾遺』四・七）を思わせるが、「閉眼の時」という時間は「屍」の語にそぐわない。『東斎随筆』は、「既ニ閉眼ノ後モ、猶抱給ヒテヲキサリ給ハズ」と時間相をずらしてそれを描く。

（2）鳥羽の死後数日の内に顕在し、勃発し、終結した保元の乱とこの説話の関係については、河内祥輔氏に詳論がある（『保元の乱・平治の乱』、吉川弘文館、二〇〇二年）が、いま踏み込まない。

（3）顕兼の歌人的側面については、田渕句美子「源顕兼に関する一考察―歌人的側面から―」（初出『中世文学』三四号、一九八九年五月、『中世初期歌人の研究』二〇〇三年に再収）他参照。

（4）このころの歌人たちの『源氏物語』受容については、定家父俊成の著名な言を引き合いに出すまでもないだろう。寺本直彦『源氏物語受容史論考』他参照。

（5）たとえば巻一―三三話には、『帝範』去傲篇の句が引かれ、三四話は『帝範』賞罰篇の主題に相応する例など。新大系脚注参照。

（6）『源氏物語』の准拠となった説話は所収している。『河海抄』に引く三条の『古事談』のうち、手習巻の横川僧都の母と妹の浮舟救出譚と『古事談』三―三二の安養尼蘇生譚は説話としてもっとも関係が深いが、両者の関係を考えるにはいくつかの手続きが必要となる（拙稿「源信の母、姉、妹―源氏物語「横川の僧都」と源信外伝成立をめぐって―」（『国語国文』六五巻四号、一九九六年）。他同手習に引く染殿后が天狐に悩まされる説話（三―一五相当）が准拠として引かれている（もう一条は花宴の「直衣布袴」の先例として二―一八話を引く）。また出典名は『江談』を掲げるが、夕顔巻のもののけ出現について、『古事談』一―七の融の霊出現譚相当話が挙がる例などがある。『古事談』がそのことにどのように自覚的であったかは、また考察を要するであろう。

（7）帝の死穢に関わる桐壺巻の「恥」と禁忌の読解については、夙に益田勝実「日知りの裔の物語」（『火山列島の思想』）に示唆多い重要な詳論があり、『古事談』の白河説話にも言及する。しかし氏の関心は『古事談』説話の『源氏物語』との影響関係ではなく、「摂関政治から院政へ、という歴史過程」における、「天皇そのものが禁縛から一部解放されて神秘性を失っていくこと」、すなわち「院政期の天皇は、摂関期の天皇とは、宝剣を離れて妻のもとへ泊まりにもいくし、死んでいく妻を抱きしめて看とってもやる、というふうに具体的に違ったもの」となり、「院政の時代がくるというのは、そういう天皇の神秘性の希薄化の意味をも具体的に含」む、とまとめ、本稿の視点とは異なっている。

（8）白河の賢子引き留めには自身の先例もある。承保元（一〇七四）年、敦文親王の生まれたときも、白河は賢子を引き留め、「まことや、中宮はいま暫しとのみ惜しみとどめ奉らせ給へば、えまかでやらせ給はで、程近くなりてぞ出でさせ給ひける」（『栄花物語』三九）という。『源氏物語』頻用語「まことや」（田中仁「「まことや」―光源氏と語り手と―」『国語国文』五〇―三、一

九八一年他）もあり、また『栄華物語』が一般に『源氏物語』に表現を依拠することから、ここは『栄華物語』の『源氏物語』依拠を想定すべきところ。但しその『栄華物語』における賢子死去の当該部には『古事談』のような『源氏物語』を想定させるような形象はない。

（9）『新古今和歌集』巻八哀傷・八〇一の「思ひ出づる折り焚く柴の夕けぶり　むせぶもうれし忘れ形見に」（後鳥羽）などを発端に論じる。

（10）「このあたりの描写は『源氏物語』桐壺巻の影響が大きい。尾張局の地位が更衣であったことも、連想を強める要因となっているようである。112六〜113二の描写と「まかでなむとし給を、暇さらに許させ給はず」（一30頁）、「『限りあらむ道にも、後れ先だゝじと、契らせ給ひけるを、さりとも、うち捨てゝはえ行きやらじ』と、の給はするを」（一31頁）などの桐壺更衣の退出の場面の描写との類似、以下に続く水無瀬御幸の記事（113四〜九）と靭負命婦の、母北方弔問の記事の前後の帝の嘆きの描写の雰囲気の類似などを指摘しておく。後出の、更衣所生の若宮の参院の記事（119〜121）も、光源氏の参内の記事を念頭におき、更に詳しく描写したものと思われる。」（『源家長日記　校本・研究・総索引』源家長日記研究会）。『新古今』八〇三、「なき人の形見の雲やしぐるらむ　ゆふべの雨に色は見えねど」の和歌について、目崎氏前掲書には「…尽きない未練を察する方が院の心に叶うのであろう。『長恨歌』にいわゆる「此の恨み綿綿として尽くる期（とき）無し」の玄宗皇帝さながらである」と論じる。「なお、後追い自殺もしかねない激情は、寵妃に対してだけではなく、寵童の場合にも見られる。建保元年（一二一三）院の母七条院の里方なる坊門家の信清の息、左中将藤原輔平が赤痢のため卒した。院はこれを寵愛すること「楊貴妃の如く」（『玉蘂』建暦二・四・十一）であった」との叙述も。

（11）金沢文庫本（『白氏文集　金澤文庫本』大東急記念文庫他）や宣賢『長恨歌抄』など。

（12）「新楽府」上陽人白髪人を承けて、「楊貴妃により目を側められて上陽宮に配せられるというその女性が、物語の構想として参加して来る場合はないか、ということになると、楊貴妃を弘徽殿女御に、上陽人を桐壺更衣に当て嵌めてみるなら桐壺巻の構図に近付く、という指摘がある」という（藤井貞和「源氏物語を中心に」『白居易研究講座　第四巻　日本における受容（散文編）』勉誠社、一九九四年）。ある意味で興味深い指摘である。

（13）『源氏物語』作中人物の年齢等はひとまず池田亀鑑『源氏物語事典』所収の稲賀敬二作成稿に従った。楊貴妃と玄宗皇帝の年齢差は、玄宗が寿王から楊貴妃を奪ったとき、「楊貴妃は二二歳、玄宗は五六歳で、その年齢差は三四歳である」（村山吉廣前掲『楊貴妃』）とされる。楊貴妃の生年については、「開元六年（七一八）か翌年の生まれであることは、どの記録もほとんど一致している」（藤善真澄『安禄山と楊貴妃　安史の乱始末記』清水新書、一九八四）という。

（14）この説話の同文的同話に『今昔物語集』巻十・七がある。

（15）『旧唐書』五十一・列伝一・后妃上・玄宗楊貴妃では開元二十四年没とし、同書一〇七・列伝五十七・玄宗諸子壽王瑁では二十五年没とする。

（16）弘徽殿女御（大后）については、本文の中に藤壺の心内語として「戚夫人の見けん目のやうにはあらずとも」以下が見え、呂太后になぞらえる文脈がある（賢木巻）。

（17）詳細は増田氏の論文参照。この問題には冷泉皇女尊子内親王の身分と呼称が関わるが、いま関説しない。柳たか氏は尊子の「妃」呼称（『椒庭譜略』『日本紀略』）について、令制の妃ではな

く、「単なる妻の意で用いられていると考える」という（次掲「日本古代の後宮について」）なお後藤祥子「藤壺の宮の造型」（森一郎編著『源氏物語作中人物論集―付・源氏物語作中人物論・主要論文目録―』勉誠社、一九九三年）にこの問題を含めた藤壺の人物論についての要を得たまとめがある。

(18) この事について、私に『続古事談』に即したエッセイを書いた（新日本古典文学大系『古事談　続古事談』の『続古事談』注釈冒頭の解題）。

(19) 後藤氏が挙げる関連論文は、川口久雄『西域の虎』（『源氏物語』の世界と外国文学」、「『源氏物語』における中国伝奇小説の影」など、吉川弘文館、一九七四年）、藤井貞和「源氏物語と中国文学」（『講座日本文学　源氏物語上』解釈と鑑賞別冊、至文堂、一九七八年五月）、鬼束隆昭「藤壺」（『源氏物語講座』二、勉誠社、一九九一年）。

(20) 村山吉廣氏前掲書にも、類似の指摘がある。なお旧稿参照。

(21) 『注好撰』上一〇一は『長恨歌序』の世界に近く、宿習を遂げんがために下界で玄宗と出会い、死後蓬莱に居て玄宗との契りを語る楊貴妃を描き、その次話一〇二では同様に女が昔浦島と契り、願いを遂げずして天仙となったが、現世船の上で亀と変じて浦島に会い、美女に戻って、本懐を遂げて共に天仙となることを求め蓬莱に連れて行くプロットを描く。『注好撰』作者にとって、両話は明確な類話として認識されていた。なお上野英二「岩崎文庫蔵絵巻物・嵯峨本―源氏物語・伊勢物語を中心に―」（彙報・平成十六年度秋期東洋学講座講演要旨『東洋學報』八六巻四号、二〇〇三年三月）は論点は異なるがいくつかの観点から浦島説話と『長恨歌』の類似を述べ、『源氏物語』考察への寄与を示唆する。

※〔付記〕本稿で論じた問題の一端は、大阪大学文学部・大学院共通講義（二〇〇四年度二セメスター開講）及び大学院演習（二〇〇五年度通年開講）で言及した。また『古事談』の読解については、川端善明先生との新日本古典文学大系『古事談　続古事談』（岩波書店）注解作業を通じて得た知見を取り込んでいることを付記し、それぞれの場で受けた啓発と学恩に深謝したい。二〇〇五年九月七日稿了、十月二十六日補訂。

―本学大学院助教授―